

るが實は、口は幸の基でなくてはならないのである。實例はこれですはりとして次ぎには、此の口は幸の基といふ事について述べ。それから方法に立ち入つて論じよと思ふのである。

子等よ汝まさまくあれや老の親の

こゝろつくしの杖しろの身ぞ

小のき日記

印東おとな

げん坊どお姉様

げん坊は満一年と十日お姉様は三年五ヶ月なり。

十二日。猿廻し来るげん坊「オト、ゝゝゝ」と喜ぶ、猿の餘り杖などつきて走り廻るに氣味わるくてか泣き出す。

十三日。午後八時すぎ母君姉君も共に蚊帳に入りて眠りかけし處へ神田の叔母さんと姉さんと來給ふ。叔母さんがたのおすし召食り給ふを見てよこせとて「ウー」と叫び出し少し許り頂きしに又箸をよこせとて之もとどり、その箸もて側にありし菓子鉢の中をつゝきてはなめ、つゝきてはなめ、果ては湯呑茶碗をとりて飲ひ眞似さへなすに叔母君たち、こゝろげて打ち笑ひ給ふ。

十四日、障子につかまり三足ほどあゆむ、手放してたつことも梢上手になりたり。晝母君と台所に居りしに火鉢の炭はね、膝の上やけどして泣く。夕方千葉より叔父君參られしに抱れて外へ出よとて「オー」と指せしも、叔父君急ぐ故、今日は勘恣せよとて立給はねば首を振りて

すねる。

すねること中々上手なり、体をねちりて首を

ふるざせ可笑どもおかし。

車に乗りて歸り給ふを見て泣く。

十五日、朝十時より午後二時まで眠る、其間二度

目を覺せしも直ぐに又ねむりしなり。母君側に

仕事を爲し居りしに、二時過ぎ眼をさまし獨り

起きて其側にすわる。

此頃切に物言ひたげに分らぬことをいふ。感心

せし時は「オーホー〜」といひ、食物は「うま

〜」といひ、蠅不入の中をのぎきては「オト

〜〜」といひ、又「バ、〜」アツチャツチ

ヤ」などいふ。

好きなものは花と猫と犬。

女部屋へ行には七八寸許り下るなり。此處まで

這ひ行き、まづ右足を下ろし右手を下につき

て左手をつき後左足をふるして這ひ行くなり。

上り下りども中々上手にて、少も過つことな

し。

お姉様は名を呼びてもお返事はすれども、お姉

さまと呼ぶとお返事の仕方の違ふも可笑し。げ

ん坊に向つては自分お姉様がねお姉様がねとい

ふ。

このお姉様の希望は色の白くなること、大き

くなつてお馬車に乗ること、おげんちゃん坊

ちゃんを負つて玩具だのお衣だのを買つてやる

ことで。

おげんちゃん坊ちゃんとは、げん坊(弟)を可愛

がりて言ふ言葉なり。さて憎む時は、くよ(黒)

赤坊〜といふ。

片言は餘り使はぬ様なせど、ら行の音は如何し
ても出ず。

ころんだり頭を打ちし位では なかく泣かざ
れど色黒しといはるゝと、小さい女中と云はるゝ
を甚だいやがりて 果は遂に泣き出す。げん坊
が臺所へ這ひ行くを見て、直「アラ男の女中が
来たよ」といふ。何でも己の云るゝ通り、げん
坊に云ふ。其時の姉振のふ菓子ねたる時の様
ど、全く反對せるこそ可笑しけれ、いとものゝ。

秋來の目にはさやっに見ねれども

風の音にぞれごろかれぬる



今昔いろは料理 (へ)

石井泰次郎

紅玉子の拵へやう

玉子のよろしきを撰みて、温湯のなかに入て、

はしにてそつとかきまはして煮ぬくべし、ゆであ
がりを見るにはあみ抄子にて、一つをすくひ上て
見るに、鍋の上よりわきへはなすとすぐにからの
水氣が乾くをよしとす、すぐ乾かずに間あるはま
だよく煮にざるなり、

さてよく煮抜たるを名づけて煮抜玉子とはいふ
なり右煮抜玉子いくつにても同じ事なり、先から
のわれめを物にあて、つけて、からをむきざりて、
鍋に紅の食用によるしき、口紅か又は細工紅の氣
上味といふをどきて、玉子を入れて、火にかけて
ころがしながら煮るべし。さて色よくつきたる時